

正確な歴史踏まえる営みを

京都大学文学研究所の水野直樹教授「享①」と立命館大学国際関係部の文京洙教授「享②」が、在日韓国朝鮮人の歴史を解説した「在日韓国朝鮮人歴史と現在」を著し、今年で日韓国交正常化50年を迎え、国交回復以来の「最悪の状況」とされる日韓関係が在日韓国朝鮮人の日常に影響を落としている。両教授は課題の解決には正確な歴史を踏まえる営みが不可欠と話す。本書は韓国併合(1910年)以降を中心に約120年にわたる在日韓国朝鮮人の歴史を概観した。植民地期の在日韓国朝鮮人の形成から戦時

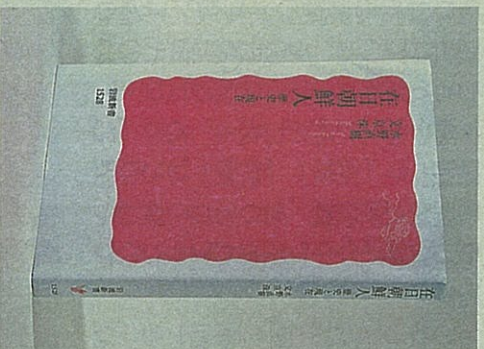
「在日朝鮮人 歴史と現在」刊行

京大 人文科学研究所 水野直樹教授
立命 大国際関係学部 文京洙教授



期の試験に至る時期は水野教授が執筆、終戦後から現在までの歴史は文京教授が担当した。

本書による、韓国併合後に朝鮮の社会経済状況の変化を受け、内地に渡って紡績工場や土木工事で労働に就く人が増え、20年代以降は河川敷などに集住地区が形成されて、「国民」として扱われるようになった。また、渡航規制がけられ、など日本人と異なる扱いを受けるなど、朝鮮人の強制連行に伴う労働力不足と植民地下



在日朝鮮人 歴史と現在

強制労働が始まる。労働環境が劣悪な炭鉱や鉱山に動員されて死者も多数に上った。朝鮮語や朝鮮文化を守るべきと唱えるだけで検挙され、戦時期日本内地での治安維持法による検挙者の約3割は朝鮮人だったと推定されるという。水野教授は韓国併合時の在日朝鮮人が数千人だったのに対し、終戦時は200〜210万人になったとい

い「日本は朝鮮人を同化し、戦争動員の対象にする一方、戦後の社会秩序を乱す存在だと考えていた」と言う。終戦後 祖国を目指す人が

韓国併合以降中心に120年を概観

急増し、46年までに150万人近くが帰還したが、大半は人近々が帰還したが、大半は中心にした70年代以降の権益擁護運動を記した。在日韓国朝鮮人の文学や思想にも多くの紙面を割き、「半朝鮮人」としての悩みを正面から描いて芥川賞を受賞した李恢成や、季刊誌「日本のな

きと唱え、日雇い労働者を取り戻す生活の糧を失い、日雇い労働者として、の多くは日本にとどまった。多くの在日朝鮮人は、20〜30年代に内地に渡った人々で、戦時や戦後の経済需要から内地的な在日朝鮮人の文学や思想にも多くの紙面を割き、「半朝鮮人」としての悩みを正面から描いて芥川賞を受賞した李恢成や、季刊誌「日本のなきと唱え、日雇い労働者を取り戻す生活の糧を失い、日雇い労働者として、の多くは日本にとどまった。多くの在日朝鮮人は、20〜30年代に内地に渡った人々で、戦時や戦後の経済需要から内地的な在日朝鮮人の文学や思想にも多くの紙面を割き、「半朝鮮人」としての悩みを正面から描いて芥川賞を受賞した李恢成や、季刊誌「日本のな

総連と民団の歴史

文京教授は「貧困層を中心にした北朝鮮への帰国運動、総連と民団の歴史や団体と韓の間で揺れ動いた人たちはい

ない。できるだけ客観的に戦後の全体像を記述した。在日コ産業など高度成長期の在日企業の実態を説明している。てほしい」と言う。岩波書店刊。886円。

(吉永周平)